



むかし、むかし、鍋谷村なべたにのある家に、いつの間  
にやら、一人の若者が住みつくようになった。

この若者の姿を、だれもまだ見たことがない  
のだが、この家では、ときどき不思議なことが  
おこった。

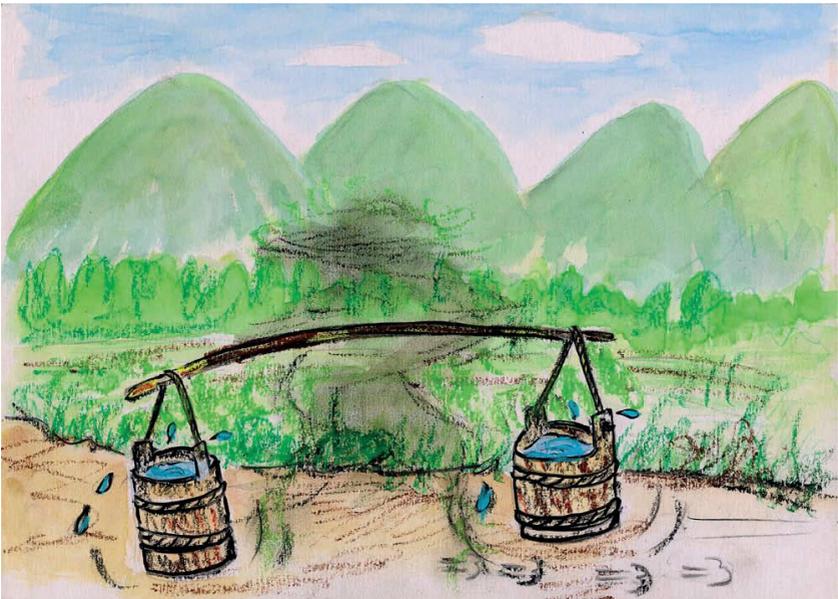
家の者が、川の水を台所へ運ぼうとする  
と、水がめには、もう水がいっぱいになって  
いる。

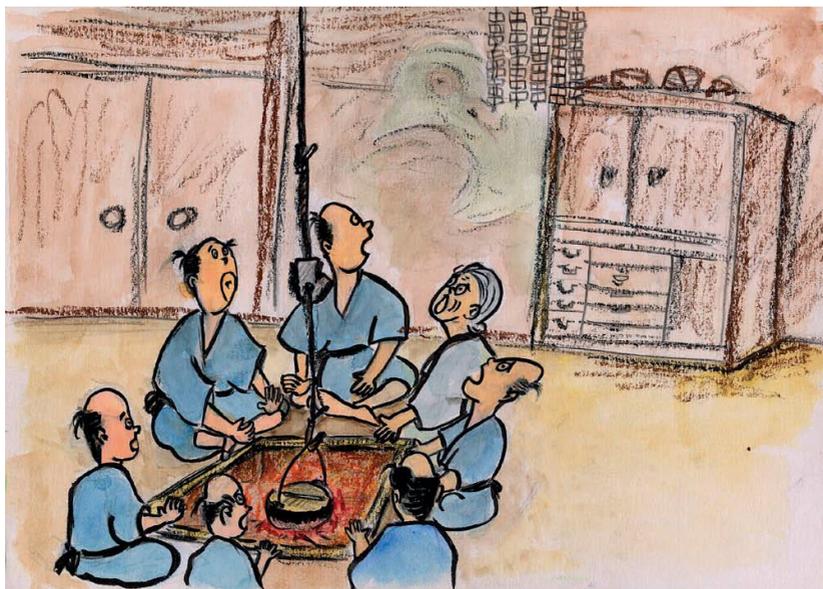
それだけではない。

米かちや肥やし運びまでしてあるのだ。

ふしぎだなあと、よくよく見ていると、水  
のはいった桶おけが、川と台所の間を行ったり来  
たりしている。米かちは、杵きねがコットンコッ  
トンと動いているだけ。

肥やし運びも、桶が、山の畑を行ったり来  
たり。





村では、姿の見えない、この若者は、カッパに違いないと言われるようになった。

そして、鍋太郎と呼んだ。

鍋太郎は、ごはんを食べん。

ご飯を食べないが仕事をよくする。

こんな都合のよい者はどこにもおらん。

その上、何でも知っていて、たいへん役に立った。

夜、村の人たちがいろいろを囲んで話をしていると、みんなの話の中に入って来て、お上からのお達しや、昔からの言い伝えなど何でも話してくれたと。

ある年の暮れのこと。

鍋谷では、年に一度、村をあげてお参りをするお講こうの日が近づいていた。

お講をする家では、家中の掃除をしたり、ごちそうをたくさん作ったりと大忙し。

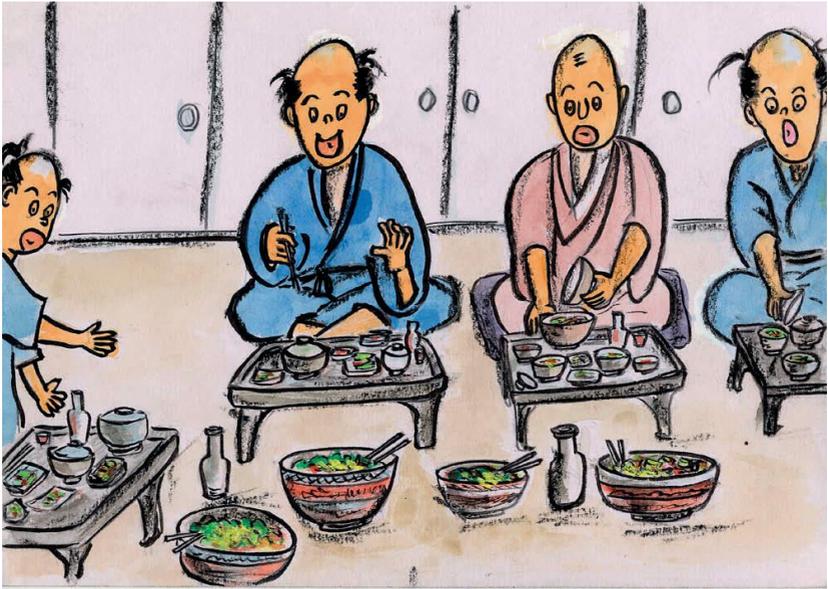
「今年のお講は、どこの家にもしてもらおうか」

「鍋太郎は何でもできる奴やから、今年は、あいつにしてもらったらどうやらか」

「独り者の鍋太郎に、そんなことをさせるのは、無理やないか」と言う者もいたが、鍋太郎は「うん、わかった」と快く引き受けてくれた。

ところが、お講の前の日になっても鍋太郎は、準備をしている様子もない。





いよいよお講の日がやってきた。

坊さまのお説教が終わって、集まった人たちが、お酒を飲み、ご飯を食べるころ、村人達の前に、次から次へとご馳走が運ばれてきた。

「うわあ、このや、てんばにうまそうなごっつおや」

「鍋太郎一人で、ようこんだけ用意できたなあ」と、村人達は、おなかいっぱい食べて喜んで帰って行った。

ところが次の日の朝、村中が大さわぎになった。

長い冬のためにしまっていたキノコやぜんまいなど、村人達の大切な食べ物が、みんななくなっていたのだ。

「よんべのごつつおな、ありゃ、うらんとこのコケじゃねいけ」

「うちのぜんまいもなくなっている。そうにちげいねい」

鍋太郎にいったばいくわされたことに腹を立てた村人たちは、鍋太郎に文句を言った。





すると、どこからか

「世間渡るにやはごまかしならぬ。天にや  
ほとけ仏が見てござぬ」といふ鍋太郎の声が聞こえ  
きた。

その言葉を聞いて、村人たちは、一人者の  
鍋太郎に大変なことを押しつけてしもうたこ  
とに気がついた。そして、自分たちが悪か  
ったと鍋太郎にあやまった。

そんなことがあった次の年、鍋太郎は、鍋谷の人たちと一緒に美川へ、炭を売りに行った。

美川の港では、イワシの大漁続きで浜辺はどこもかしこも、イワシの干場になっていた。

そのイワシが、ちよくちよく盗まれるということとで、町では干場に見張り番をおき、盗人を捕まえようとしていた。

ところが、盗人はなかなか捕まらず、みんなはイライラしていた。

ちようどそこへ、炭を売りにきた鍋谷の人たちが通りがかった。

「あっ、ありゃなんや」

町の人々が指さす方を見ると、炭俵を背負っている人たちの中に、俵だけがひよこひよこ動いているではないか。

姿の見えない奇妙な者が、盗人に違いないと思いきんだ美川の人達は、姿のない背負俵を捕まえた。





そして、船小屋へ連れて行き、トウガラシ  
でいぶし始めた。

このトウガラシぜめには、さすがの鍋太郎  
もこらえ切れずに姿を現してしまった。そし  
て

「我こそは吉原よしはらの藪やぶに千年、鹿島かしまの森に千  
年、鍋谷の淵ふちに千年住むカッパだ。命を助け  
てくれるなら、恩はきつとかえす」と、叫ん  
だ。

けれど、荒海をこぎまわって魚を獲っている気の荒い漁師たちは、寄ってたかって、鍋太郎を棒で叩きのめした。

「鍋太郎はそんなことはせん。助けてやってくれ」

鍋谷の村人たちは、地面に頭をすりつけて頼んだが、もう漁師達の怒りは納まらん。

とうとう鍋太郎をなぐり殺してしもうた。





村人たちは変わり果てた鍋太郎の亡骸なきがらを、  
泣く泣く鍋谷へ連れて帰り、みんなで、鍋谷  
の山に葬ったということです。

絵・後 泰夫



むかしむかし、鍋谷（なべたん）村の阿寺といふところに、小左衛門という若者が、年寄いた母親と、たった二人で暮らしておった。

小左衛門は、鍋谷村の中でも ちよつとやそつとのことでは驚かんほどの評判の豪傑者じゆうせいのやつた。

鍋谷の若い衆の間では、肝だめしをすることが、たびたびあった。

ある日、鍋谷で葬式があった暗い晩のこと。

「どうや、三昧さんまいの火葬場かそうばへ行って、死体の上

のせてある鎌を持って来る、というのはどうや。だっか（だれか）やれる者おらんか。」

若い衆がしらが言った。





これには、曰ぐる自分こそはと大きな口をた  
たいている者も、それぞれ顔を見合わせながら  
黙りこくってしまった。

しばらくたって、小左衛門は

「うらにまかせておけ」と言いながら立ち上  
がり、

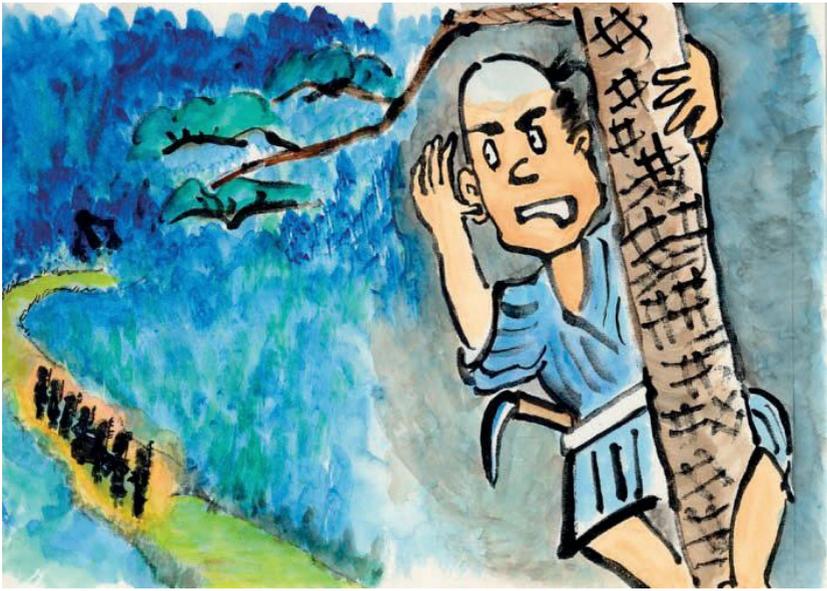
「よっしゃ」と手にツバを吐きかけ、肩をい  
からせて出かけていった。

カ<sup>り</sup>んで三昧まで来たが、いよいよ死体の上  
のせてあった鎌に手をかけると、さすがの小左  
衛門も気味悪くなり、背中に水をかけられたよ  
うにぞくぞくとし、身ぶるいが止まらんかった。

それでもと、鎌をひつつかんで無<sup>む</sup>常<sup>じょう</sup>堂<sup>どう</sup>から飛  
び出し、暗がりの道を一<sup>い</sup>目<sup>め</sup>散<sup>さん</sup>に<sup>に</sup>かけ出した。

どこまで走ったのか、走っても走っても、な  
かなか村へは着かん。





ところが突然、あたりが明るくなったかと思  
うと、どこからか人のささやく声がする。

「小左衛門、小左衛門」と、どうも自分を呼  
んでいるような。

キツネにでも化かされたのかと思った小左衛  
門は、とっさに 道端の松の木にはい上がり、  
あたりのようすをうかがった。

すると、生ぬるい風が、ふあっと吹いてきて、棺桶をかついだ人たちの行列が見えて来た。

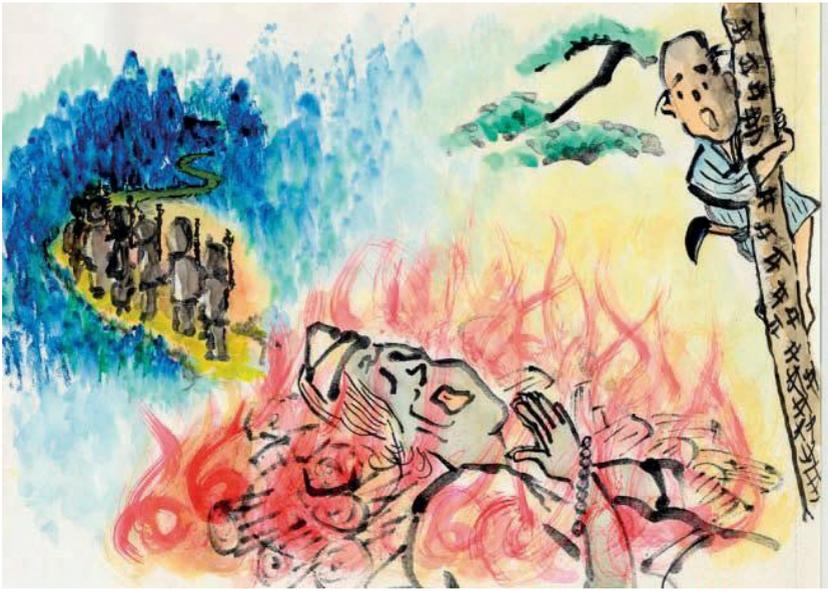
行列は、小左衛門のいる松の木の下まで来ると、立ち止まり

「小左衛門、お前のかあかが死んだんやぞ、はよ降りて来いや。」と口々に言った。

そして、棺桶の中から死体を出しはじめた。

驚いたことに、なんとその死体は、小左衛門のかあかではないか。





さすがの小左衛門も、思わず声をあげようとした。

が、「いや、まて、これはキツネのしわざや。声なんか出そうものなら」と思い直し、様子をつかがった。

やがて人々は、かあかの死体に火をつける  
と、もと来た道をそろそろと帰って行った。  
すると、どうだろう。

めらめらと燃えさかる火の中で、死んでいたはずの かあかが、むっくり起き上がり、木の上の小左衛門をにらみつけ、

「おどりゃ、小左衛門。おめえ、かあかが焼かれとると言うのに、助けにも来んと、なんと薄情なもんや。ただでは生かしておけん。」





そう叫ぶと、かあかは木をゆすぶり始めた。

さすがの豪傑者も、体を震わせて縮こまっていると、かあかはスルスルスリと蛇のように体をくねらせて、木に登ってきたではないか。

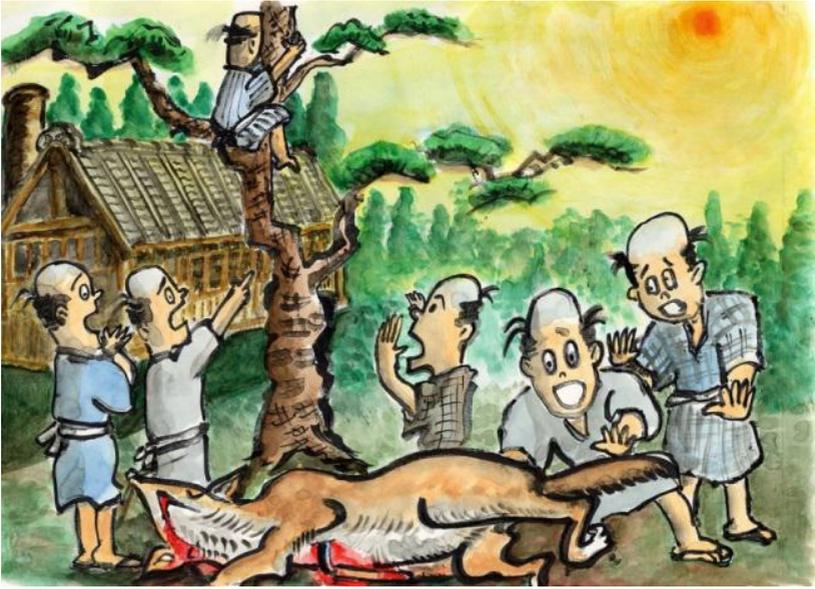
あわてた小左衛門は、やっとの思いで、木のてっぺんまではい上がった。

だが、たちまち かあかに足を捕まれ、引きずりおろされそうになった。

もう、これまでかと思ったとき、お堂から持ち出した鎌に気づいて、かあか目がけて投げつけた。

鎌は、ゴスリッと かあかの胸に突き刺さり、かあかは真っさかさまに落ちていった。





村の若い衆は、一晚中待ったが、小左衛門が帰って来ないので、夜が明けるなり小左衛門を探しに出かけた。

無常堂の近くまで来ると、松の木の根元に大きなキツネが、深い傷を負って死んでおった。

小左衛門は、とあちこち探すと、木の上でブルブル体をふるわせているではないか。

若い衆に呼ばれて、やっと木から降りて来た小左衛門、それからというもの、無茶なことをしなくなったそう。

絵・後 泰夫



むかし、むかしのことです。

栗生から寺井にいく途中に、二道山というところがありました。この山の中で道が三つに分かれ、あちこちの村と通じているので、人びとは「二道山」というようになったのです。

この山には、杉や松の大きな木がおいしげり、まっぴるまでもうす暗く、それはそれはさみしいところでした。そのうえ、年をとったためおとの古ぎつねがすんでいて、それが若いむすめに化けたり、ばあばに化けたりして、その道を通る人びとをからかったり、だましたりしていたそうなの。

そのころ、寺井きゅうへえに久兵衛きゅうへえという馬かたがすんで  
いました。

この久兵衛はしょうじきものですが、負けん気  
がつよく、そのうえ力もちとあって、人びとから  
「鉄火てつかの久兵衛」とよばれる働き者でした。





ある晩、久兵衛は寝つかれないまま、あれこれと考えていました。

というのは、きょう仕事の行き帰りに、三道の大きな杉の木のおそばから、いきなりとびだしてきた白髪しろがみのおばあさんのことです。

「ひょっとすると、あれはうわさにきく三道山にすんでいる、よく人をだますあのキツネめにちがいない。」と久兵衛は思いました。

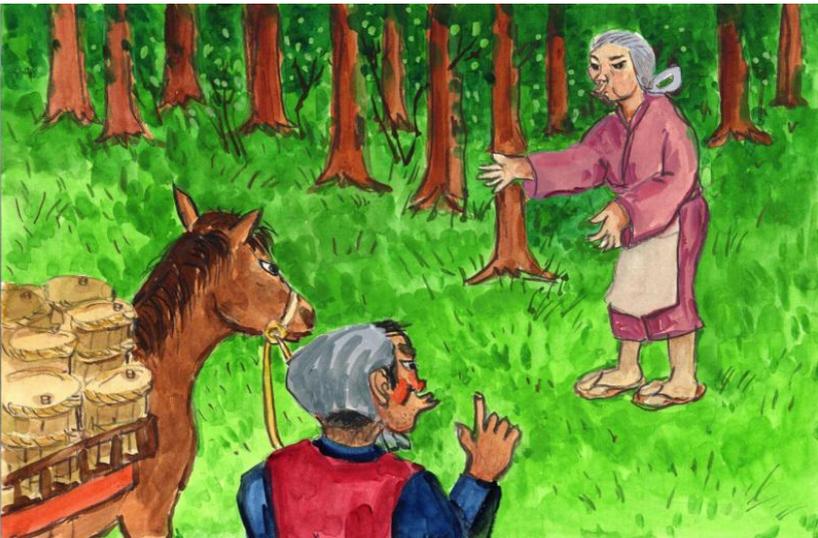
次の日の夕方、いつもの杉の木立にさしかか  
ったときです。

「馬方さん。その馬に乗せてくれまいか。」

「おや、おや、ばあさん、どこまで行かっ  
ちゃぬ。」

「寺井までじゃが・・・。なあにせ、とじを  
とると足がよわってなあ。」

「そうかい、そうかい。そーれはおまのへん  
な。荷物のせる馬じゃけん、少々ゆれるし、道  
がわるいが、少々がまんしてくだしゃれや。」





（おーし、きょうこそしつめを生けど  
りにしてくれよう）と、しらがのぼあさんを  
馬に乗せ、酒の空<sup>あ</sup>きだるといつしよになわで  
しぼりつけてしまいました。

「これ、そんなにきつくしぼらんでもええ  
じゃろが。」

しかし、久兵衛は平気な顔をして歩きだし  
ました。

「もうええから、降ろしてください。」

「寺井はまだまだじゃ。」

「おしっこがしとうなった。はやく降ろしてください……。」

「そのままではさっしやい。」

久兵衛は（きょうこそはきつねに化かされんぞう）と心にきめ、相手にはならず自分の家までつれてきてしまいました。





しらがのおばあさんを馬からおろすと、ひっぱ  
ていき、かきの木にしばりつけてしまいました。

「う、馬かたさん、なにをさっしやる。このな  
わをほごいでくださっしやね。」

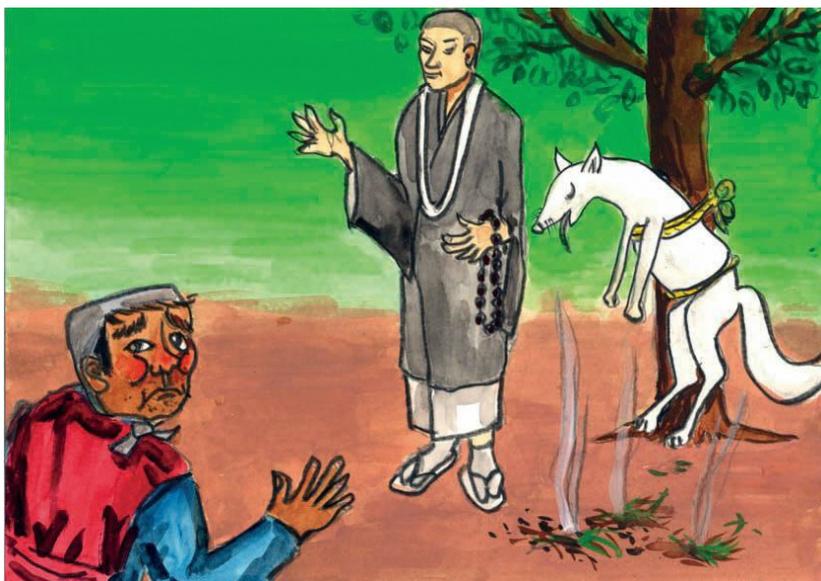
「ばあさまとはうまく化けたもんじゃ。ほんと  
うは三道山の白ぎつねじゃろが。もおうかんにん  
ならん。いまに杉葉すんばをもやして、いぶしてやっか  
ら。」

「ま、まってくれ。う、馬かたさん、とっし  
よりのいじめんでくれ。」

「わかつとる。わかつとる。」と、いいなが  
らも久兵衛は、すん葉をひとかかえも集めてく  
ると おばあさんの足もとでいぶしはじめたか  
らたまりません。

「かんにんして、かんにんして・・・」  
がまんしきれなくなったおばあさんは、とう  
とう正体をあらわしてしまいました。





ちょうどそのとき、寺井の専應（せんおう）というお坊さんが通りかかり、

「久兵衛さんや、そりゃかわいそうじゃ。いくら悪さをする白ぎつねでも『かんにんして、かんにんして』とたのんどのに。まあ、わたしのたのみじゃ、助けてやってくれや。」

「ええっ、いくら専應さんのたのみでも、こればかりは。」

「久兵衛さんや、その気持ちはわかるが、そこをなんとか……。」

いつも世話になっている専應さんに、こんなにたのまれたので、「はい わかりました。そんなにおっしゃることじゃから、はなしてやりましょう。」と、しびしびなわをといて、きつねをはなしてやりました。

きつねは専心さんにぺこんと頭をさげ、久兵衛にはなんともなんとも頭をさげるとともに、しっぽを振って礼をいい、三道山の方へいそいで逃げていきました。

逃げていくきつねをいまいましげに見ていた久兵衛はふと気がつくと、今まで自分の目の前にいたあの専心さんがいらっしやらないではないか。

（あれっ、そういうえばきょうは村に法事もなしのの・・・）と久兵衛はふと頭をかしげました。





その晩のことです。即得寺そくとくじの門をこんとんとたくも  
のがありました。

（こんな夜ふけに、いったいだれだろう」と、専應さ  
んが出てみると、しらがのおじいさんと おばあさんが  
立っていました。

おばあさんは「わたしどもは三道山の白ぎつねのふう  
ふでございます。きょうはあぶないところを たすけて  
いただいて、ありがとうございます」

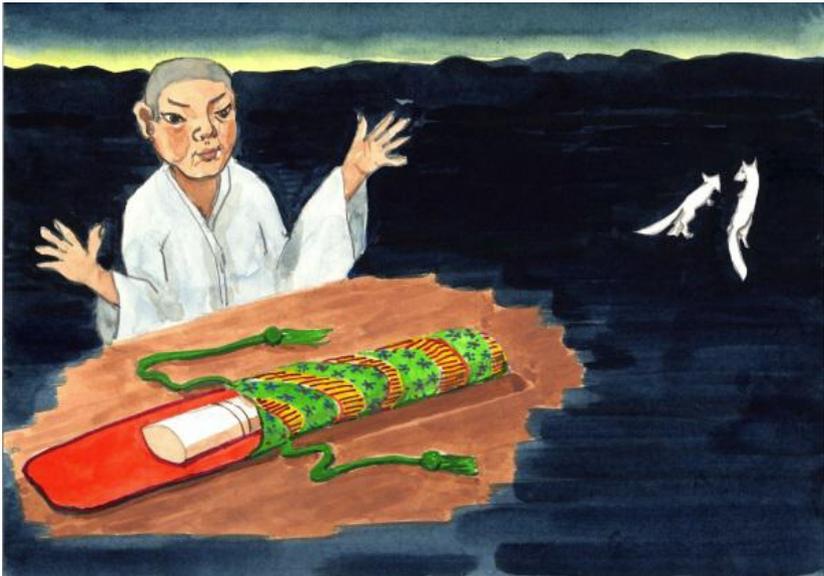
おじいさんも「このばあさんを助けたいばかりに、  
専應さんになりますまし、しょうじきものの久兵衛をだま  
かしてしまいました。」と、涙を流して、なんどもお礼  
をいいました。

はじめはなんのことかわからなかった専應さんです  
が、ふたりのはなしをすっかり聞きおわっていいまし  
た。

「人を化かすのはわるいことじゃ。でも、済すんだことは仕方あるまい。これから困ったことがあったら、この専応に相談さっしやい。三道山にいるよりも、この寺に引越したらどうじゃ。」

おじいさんとおばあさんは、お礼に白さやの短刀をひとふり専応さんに渡すと、たちまち二ひきの白ぎつねになり、なかよく三道山にかえっていききました。

それからいく日かたって、三道山の白ぎつねは、そろって即得寺の御堂みどうのえんの下にうつりすみ、朝や晩のおつとめには熱心におまいりしたところじやうす。





そののち、寺井に大火事がおこり、ほとんどの家が燃えたことがありました。

そして火のいきおいが即得寺にせまったとき、専応さんは、白きつねからもらった短刀で火の粉を振り払うと、風向きが変わり、寺に燃え移らなかつたし、門のまえの久兵衛さんの家も助かつたといわれています。

今も即得寺の庭には、きつねづかがあります。また白きつねからもらった白さやの短刀は、『火よけの刀』といわれ、寺の大切な宝物としてこのまゝ残っています。

絵・北野 憲正



むかし、むかしのこっちゃん。

根上に、まだよしややぶがいっぱいあったとき  
のこっちゃん。

根上にごん太<sup>た</sup>ちゅう男の子がおったがやと。  
ある日のことや。かあちゃんに、お使い頼まれ  
たんやと。

「ごん太、このくず米を粉にしてもらってき  
て。うまい団子<sup>だんし</sup>こしらえてやっさけな」

「え、団子<sup>だんし</sup>? やったア」

「ごん太、氣い付けていーけんぞ。途中で、キツネにばかされんなや。こないだも、がんこもんの松五郎さんがだまされたところぞ。」

「大丈夫や、どんねえ、どんねえ、氣いつけていくわ。」





(歌いながら)

「団子 団子 おいしい団子

お米をひいて 粉にして

かあちゃんを作る 団子やよ

うーまい うーまい 団子やぞ」

ごん太は、ずんずんずんずん歩いて行った。

すると、何やら声がした。

「おおー深え、おおー深え！」  
「おっちゃん、何しとれん？」

ごん太が近づいてみると、男が川で何か  
しつゝる。

ごん太も川に入ってみた。





「何や、浅いがいね」

ほやけど男はまだ

「おおー深え！ おおー深え！」

って言いながら、何かを捨うつる。

「おっちゃん、何ひろうとれん」

見ると……

「おお、魚や！」  
川には魚がでっかと泳いどったがやと。





「魚や、魚や！」

「ごん太は夢中で魚をつかんで、袋に入れた。」

「おお、でっかとおるわー！」

魚は面白いようにとれた。ほやけど男の

ほうは、相変わらさず

「おおー深え！、おおー深え！」

ちゆうばっかしで、一匹もとれんがや。

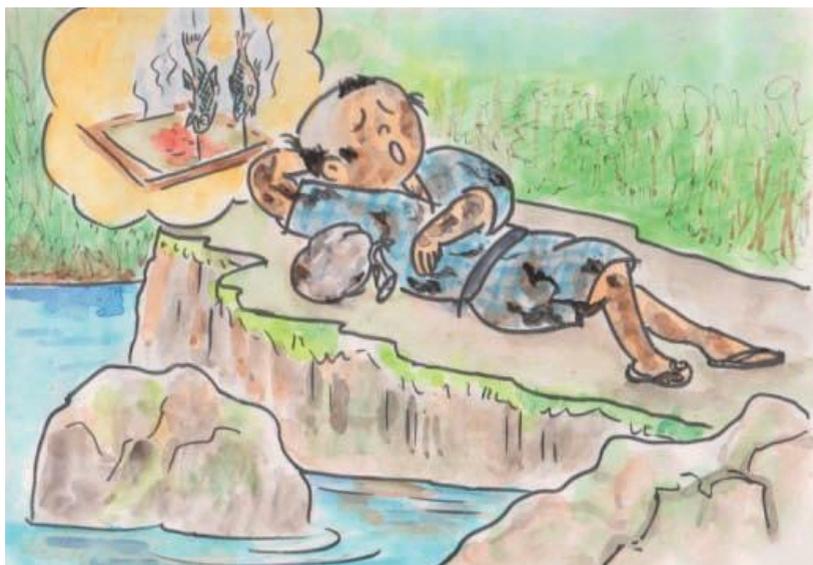
それを見たごん太は、

「おっちゃん、へたくそやなあ」

ごん太は得意になった。

魚をでっかどとって、ごん太は疲れてしも  
世の上でねてしまた。

「ひーすーぴー ひーすーぴー」





しばらくしてごん太は目を覚ました。

「こんなにごん太は目も覚まして、晩のおかずには十分や。かあちゃん喜ぶやろなあ」

「やれやれ、ごん太はもうすっかり、お米のことを忘れてしまった。」

「かあちゃん、ただいま！でっかどと  
ってきたぞー！」

「ごん太、でん、そのかっこう・・・」  
かあちゃんは、びっくりぎょうてん。

何とごん太はドロドロに汚れて、おまけ  
に着物のすそまで破れとった。

「魚やぞ。ほら、晩のおかずや」

「ごん太…おまえ、キツネに化かされた  
んや」かあちゃんは、袋を開けた。





袋いっぱいにつまっとったんは、何と松ぼ  
っくりやった。魚なんか、一匹もおらんかっ  
た。

おまけに袋の底もビリビリに破けて、お米  
もからっぽやったんやと。

絵・後 泰夫